

2022. 9. 18 (日) 使徒4:13~14

4:13 彼らはペテロとヨハネの大胆さを見、また二人が無学な普通の人であるのを知って驚いた。また、二人がイエスとともにいたのだということも分かってきた。

4:14 そして、癒やされた人が二人と一緒に立っているのを見ては、返すことばもなかった。

<説教>

学んで来ているように、〈彼ら〉(11)とは、〈大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレクサンドロと、大祭司の一族〉(6)、〈民の指導者たち、長老たち、律法学者たち〉(5)、そして〈祭司たち、宮の守衛長、サドカイ人たち〉(1)です。彼らはユダヤ人の宗教的・政治的指導者、権力者であり(彼らをを含めたユダヤ人は当時ローマ帝国の支配下にありましたが)、「最高法院」(ギリシア語:サンヘドリン)という議会を構成していました。彼らは前の日に捕らえ留置しておいた二人の使徒ペテロとヨハネを議会に引き出し、〈二人を真ん中に立たせて、「お前たちは何の権威によって、また、だれの名によってあのようなことをしたのか」と尋問)しました(7)。それは単なる「お尋ね」ではありませんでした。〈尋問〉と訳されているように、この議会は二人に対する裁判の場でした。〈彼らは、二人が民を教え、イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えていることに苛立ち〉(2)とルカが説明しているように、この裁判は議会側の人々が二人を責めるための裁判だったと言えるでしょう。結果何とか〈二人が民を教え、イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えていること〉を止めさせようという目的の裁判だったと言えるでしょう。もうそんな魂胆、敵意が見え見えの大勢の人々に二人はぐるりと取り囲まれ、〈真ん中に立た〉されたのです。もし自分がそういう場に置かれたらどうでしょうか？

そもそもそんな状況に置かれる前に、そんな状況にならないようにしたい。またもしそうなったら、事が大きくならないように、責める人たちの機嫌ををそれ以上悪くしないようにさっさと自分から謝ってしまう。またこんなことで自分の家族や友人知人に迷惑がからないように、危険にならないように何とかうまい抜け道を考えたい。そんなところが私たちの本音、肉の思いというものでしょう。

しかしこのとき〈聖霊に満たされ〉(8)たペテロ(ヨハネも同じ)はそんな誘惑を退けました。8-12節に書かれているように、ペテロは「はっきりと」、「確信をもって」、「はばかることなく」、「全く遠慮せずに」、「公然と」、つまり「大胆に」答えました。それは「こんな答えをしたら100%確実に彼らの機嫌を一層損ねる。間違いなく彼らの苛立ち怒りの火に油を注ぐことになる。」内容でした。そんな〈ペテロとヨハネの大胆さ〉を彼ら議会(告発者であり裁判官である人々)は見て、驚きました(13)。二人の「大胆な話しぶり」(口語訳)とは、もちろん「おおみえ」でもなく「はったり」でもなく「話術」でもありませんでした。それはまた「人の性格」の問題でもありませんでした。それは神に祈り求めつつ聖霊に満たされ、聖霊に導かれてのことでした。また先主日にも確認しましたが、それはイエスのお約束のとおりでした。「また、人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」

(ルカ 12:11,12) 二人の「大胆さ」は 100 %イエスの御霊、聖霊の力に拠るものでした。

さて彼ら議会の人々が驚いた理由として二人の大胆さと共に〈二人が無学な普通の人であるのを知つた〉ということも 12 節に書かれています。訴える側がそのまま裁判官みたいな歪んだ裁判でしたが、それでも一応形の上では二人の「経歴」について改めて調べたのか、または何らかの「証言者」がいたのかもしれませんが。とにかく〈二人が無学な普通の人〉だと確認されました。(無学)とはこの場合「聖書や律法について律法学者に師事せず、正式には学んでいない」というような意味です。(普通の人)と訳された言葉も「専門教育を受けていない」というような意味で、他の箇所では「初心者」「初心の人」「素人」と訳されています。議会の人々は、「聖書や律法を正式の律法学者の学校で学んだことのない素人どもに何が分かるか」と高(たか)をくくり、二人を見下していたのでしよう。二人は、聖書のことばを語り、その聖書が預言し指し示しているところの〈私たちが救われるべき名〉として〈天の下〉で〈人間に与えられて〉いるのは〈ナザレ人イエス・キリスト〉のほかにはないと大胆に語り、議会(律法の専門家や祭司たち、民の指導者たち)に教えたのです。それがまた議員たちのしゃくにさわったことは想像に難くありません。何よりもまた〈ナザレ人イエス・キリストの名〉を聞くことに耐えられなかったことでは。そしてその〈イエスとともに〉二人がいたことが〈分かってきた〉、つまり事実としてははっきりと確認され(てしまい)ました(二人が自分から証言したのか、または別の目撃証言者がいたのか、分かりませんが)。「何の権威によって」「その権威はだれから」という質問をイエスも受けていたことは先主日にも見ました。イエスはそのとき(に限らず、常に)大胆に語り、行動なさいました。そしてイエスに対しても、ユダヤ人たちが「この人は学んだこともないのに、どうして学問があるのか」と言って驚いたことがヨハネ 7:15 に記されています。それで私たちは、ペテロとヨハネの「大胆さ」も『無学な普通の人』さ』もいわば「イエス譲り」であり、イエスからの賜物だと知るので。なお、よく考えればわかることですが、「無学な普通の人」というのは、確かに聖書を専門的には学んでいない人のことですが、だからと言って怠けて聖書を読まなくてもいい、学ばなくてもいい、どうせいざとなったら何か不思議な方法で神さまが示してくれるさ、というようなことでは絶対にありません。イエスは神であられ、聖書の著者そのものであられたから完全に正しく聖書を知り、聖書を解釈し、適用なさいたのは当然です。またペテロとヨハネたちにしても、かつて〈イエスとともにいた〉のであり、また議会に引き出されたそのときも聖霊に満たされており、聖霊によってイエスが彼らと共におられたのでした。聖霊によってイエスのみことばをよく思い起こし、よく聖書を学び直し、よく神に祈り、よく神の知恵を受けて聖書を正しく解釈し、語り行動することができたのです。

さて、あの生まれつき足が不自由で、ナザレのイエス・キリストの名によって〈癒やされた人〉も〈二人と一緒に立つて〉いました(14)。この人も自分の身の危険を省みず、大胆に、また「無学な普通の人」としてそこにいました。その裁判の場で彼が何か話したかどうかはわかりません。しかし彼も確かに生きて働いておられる復活のイエスの歴とした証人でした。彼はすでに〈神を賛美しつつ二人と一緒に宮に入っ行き、〈人々はみな、彼が歩きながら神を賛美しているのを見た〉(3:8,9)のであり、イエスの証人となりました。そのことも最高法院は認めるほかなかったでしょう。〈返すことばもなかった〉とは「何も反論することができなかった」ということです。この「反論する」という言葉

がルカ 2:15 にあります。「あなたがたに反対するどんな人も、対抗したり反論したりできないことばと知恵を、わたしが与えるからです。」という約束をイエスが真実に果たしてくださったことがわかります。

こうしてイエスの敵対者たち大勢に取り囲まれ、厳しく不利な状況と見られた裁判の〈真ん中〉に、その真っ最中に、イエスがこの二人三人と〈一緒に立って〉おられたのです。